

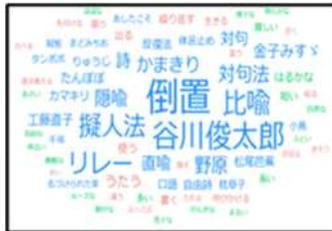
表現技法を用いて空にかかわる詩を作り、オリジナル詩集を作成することを単元のゴールとして設定しました。

第1時は、学習計画を立てる時間となります。「めあてをもつ」(計画)「何を学ぶかつかむ」(計画)場面を仕組みました。



学習計画へ

単元を貫くめあての設定に向けて話し合う生徒



生成AIでまとめた生徒の詩の印象

- ① 詩の構成と考察
- ② 色んな詩を読む
- ③ 表現技法
- ④ 面白い話の特徴

4	3	2	1	時間
オリジナル詩集を作ろう	空の詩を読み、工夫を見つける	表現技法について学ぶ	学習課題を設定し、学習計画を立てる	学習活動(それぞれの時間で修正しても良い)

学習計画表

【めあてをもつ】

教材との出会いの場では、「詩と聞いて思い浮かぶものは?」というアンケートを実施し、その結果を生成AIによるテキストマイニングで提示しました。続いて、教師が生成AIを用いて作成した『空』という詩を示し、自由に批評する場を設けたところ、「日記のようだ」「表現の工夫がない」といった意見が出されました。

その後、表現技法への意識が高まった段階で、「オリジナルの空の詩集をつくろう」という単元を貫くめあてを設定し、達成するために、どのように学習を進めるのか、グループや学級で話し合いました。

【何を学ぶかつかむ】

オリジナル詩集をつくるために、単元を通して「何を、どのように学ぶか」計画を立てました。教科書を見て考える生徒A、既習事項を振り返る生徒Bのように、一人一人が自分なりの学習計画を立てることができました。

その後、学級で話し合い、「表現技法を学んでから、教科書に載っている詩の工夫を探すと、自分たちの詩集づくりに生かせると思う」という意見をもとに、順序立てた学習計画を立てることができました。

教師の働きかけ

生成AIテキストマイニングを活用し、詩の表現技法にかかわる既習事項を確認させました。

生成AIが作成した詩を批評させることで、単元で何ができるようになればよいかをつかませました。

自分の学ぶべきことは何か、そのための毎時のめあては何か、グループや全体で共有する場をもちました。

学習計画を作成する際には、教科書の学習の流れを参考に考えるよう伝えました。

個人で計画を立てた後、よりよいものにするために学級で話し合うことで、この単元で何を学ぶかをつかませました。

「オリジナルの空の詩集をつくろう」というめあてを自分たちで考え、設定したことで、めあてを達成しようとする意欲的に学習に取り組もうとする姿が多く見られました。

一人一人が教科書の学習の流れを参考に、自分なりの学習計画を立て、それを持ち寄って、学級で意見を出し合いながら学級の学習計画を作成することで、この単元で「何を、どのように学ぶか」を明確にすることができました。





江戸時代は大きな争いがなく安定していたことを内政や外政の観点で説明できることを単元のゴールに設定しました。第1～4時は、予想をもとに江戸幕府の政策を調べる時間です。「単元の見通しをもつ」（計画）「自らツールを選び、学習に取り組む」（選択）場面を仕組みました。

単元名「武士による政治の安定」単元進行表

時	学習場面 学習目標	事例のめあて	振り返り 物に学ぶこと（歴史的事象）	次単元に活かしたいこと
1	導入ダンス	単元の問題「なぜ、江戸時代は争いが少ないのか」江戸幕府はなぜ争いを防いだのか	() () () ()	() () () ()
2	江戸幕府の大名支配		(S・A・B・C) (調べ学習)	
3	江戸幕府の海外交流		(S・A・B・C) (調べ学習)	
4	江戸幕府と外国との関係		(S・A・B・C) (調べ学習)	

6/6 白元のまとめ ・単元のまとめ (S ・ A ・ B ・ C) ・ゾレタスト () 点

■チェック項目

江戸幕府の大名支配について	江戸幕府の海外交流について	江戸幕府と外国との関係について
教科書P140～141	教科書P142～143	教科書P144～145
学習シートP140	学習シートP142	学習シートP144
児童が作成した「幕府のまとめ」		

■評価

調べ	[S] 調べたこと、調べた方法、調べた結果をまとめる。	[A] 調べたこと、自分の考えをまとめる。	[B] 調べたこと、自分の考えをまとめる。	[C] 調べたこと、自分の考えをまとめる。
まとめ	[S] 「内政」と「外政」の観点や、その取り分けによる大名や百姓への影響という観点で説明している。	[A] 幕府の関わりについて、「内政」と「外政」の観点で説明している。	[B] 江戸幕府の取り分けが、説明できている。	[C] 調べたこと、自分の考えをまとめる。

使用した単元進行表

児童が作成したキャンディーチャート

学習計画へ

【単元の見通しをもつ】

「なぜ、江戸時代は争いが少ないのか」という問いから、既習内容をもとに予想を立てました。児童の予想を教師が「江戸幕府の内政と外政」に分類したことで、児童は、「庶民や大名の反乱を防ぐ政策を調べる」（内政）「外国との交流を調べる」（外政）など、単元進行表にまとめました。その後、単元進行表に、毎時間のめあてを記入し、調べ学習を進めていきました。

【自らツールを選び、学習に取り組む】

調べ学習では、自分の目的に合った思考ツールを使い、教科書やインターネット、動画などを活用して学習に取り組みました。児童Aは、調べた事実と自分の考えを整理するためにキャンディーチャートを使用し、幕府の定めたルールや海外政策などに分類してまとめ、課題解決を進めました。

教師の働きかけ

単元進行表に、単元の学習目標や時間数などを記載し、見通しをもって学習に取り組めるようにしました。毎時間の課題をもとに、「何を調べるのか」「どうやって調べるのか」「誰と調べるのか」を考えさせて、調べ学習に臨ませました。

自己決定場面を大切にし、調べる内容や方法を自己選択できるようにしています。調べ学習に使うツールや教科書、1人1台端末は、これまでの活用場面を想起させ、自分でより良いものを選ぶよう声掛けしました。

ツールを活用し、自分の思考を整理・分析させ、新たな考えに気付けるようにしました。また、児童のまとめを紹介し、価値付けしました。

単元の見通しをもち、何を学ぶかが明確になったことで、自分が興味をもったことから学習目標を決める姿、自分に合った方法で調べ学習を進める姿、一つのことをじっくり調べる姿も見られました。

自分で学習計画を立て、計画に沿ってツールを選択しながら学習を進めることで、児童が問いを自分事として捉え、進んで学習に取り組むようになりました。



「My Favorite in Tokyo !」の単元では、東京を訪れるALTに、東京のおすすめを紹介することをゴールとして設定しました。第1・2時は、ALTから依頼を受け、紹介する内容やその英文を考えます。第5・6時は、ゲストティーチャーからアドバイスをもらいます。「何がわかればよいかつかむ」（計画）、「地域の方と協働して学びを深める」（協働）場面を仕組みました。



ALTのビデオレター



アドバイスを求める生徒A

【何がわかればよいかつかむ】

ALTからのビデオレターを視聴した生徒たちは、ALTに紹介したい東京の名所や名物を考え始めました。生徒Aは、当初、浅草を紹介しようと考えましたが、同じ考えの友達が多いことを知り、悩みました。教師から、「行ったことのない名所を紹介されたら嬉しいんじゃない?」という助言を受けた生徒Aは、20年前にはなかった名所を探し始め、どんな英語表現を使えばよいのかを考え始めました。

教師の働きかけ

「母国に帰国したALTからのビデオレター」を見せることで、生徒たちに目的意識をもたせました。

東京にある様々な場所や食べ物からALTが喜びそうな「My おすすめ」を選択できるようにしました。



Bさんに「東京スカイツリー」を紹介する生徒A



ご協力いただいた地域の方々

【地域の方と協働して学びを深める】

ゲストティーチャーに向けて「My おすすめ」のプレゼンテーションの練習を行う授業で、生徒Aは、地域の外国人Bさんに東京スカイツリーのプレゼンをしました。Bさんから「I want you to の発音に気を付けるように」というアドバイスをを受けた生徒Aは、正確な発音に近づけるため、Bさんと何度も発音練習をしました。発表会では、ALTから「Excellent」という高い評価をもらうほどの発音で発表できました。

コミュニティ・スクールとしての強みを生かし、地域の外国人や英語が堪能な方々に来ていただいて、ALTへのプレゼンテーションを聞いてアドバイスを頂く機会を設定しました。

生徒の意欲を向上させるために、地域の方へ「ALTになったつもりで、生徒にアドバイスしてください」とお願いしました。



学習計画へ



授業風景

導入で「ALTからのビデオレター」を用いたことで、「ALTに東京を楽しんでもらえるようなプレゼンテーションにするには、どうしたらよいのだろう」という、目的意識をもたせることができました。

地域の協力者から発表や発音についてのアドバイスをしていただく機会を設けたことで、生徒の意欲が高まりました。加えて、美しい発音に触れ、正確な発音をしようとする生徒が増えました。



1学期の調べ学習のまとめを踏まえ、実際に自分たちができることを考え、2学期にはそれを実践することを目指しました。第5～13時は「自分たちの力でできること」をチームで考える時間です。「学び方や課題を選ぶ」（選択）、「友達と考えを共有し、自分の考えを更新する」（協働）場面を仕組みました。



実験の準備をする
子供たち

実験開始



通学路の奥までごみを探しに行く子供たち

【学び方や課題を選ぶ】

「海に浮かぶマイクロプラスチックごみを減らしたい」という思いをもったチームAは、バイオプラスチックに着目し、自分たちにできることを話し合いました。家にあつた店のビニル袋やストローがバイオプラスチック製であることを知った児童Cは、「本当に溶けるのか実験しよう」とチームに提案しました。児童Dは、「実験結果がわかったらみんなに知らせて、使ってほしい」という思いをもちました。

【友達と考えを共有し、自らの考えを更新する】

チームBでは、「川のごみは周囲の陸から落ちてくることが多い」という児童Eの発言を聞いた児童Fが、「通学路から少し離れた、人目につかない場所にも行ったほうがよい」と提案しました。2人の提案を受け、学区地図を見ながら、どのあたりにごみが多いかを予想し、活動するルートを話し合いました。

教師の働きかけ

イメージマップを活用し、チーム内の思考を整理させる時間を設けることで、活動に向かえるよう支援しました。

これまでの学びの蓄積や参考になるサイトを用意し、自分たちで調べられるようにすることで、「バイオプラスチックに関して自分たちが活動できることはどんなことがありそうか」と考え、選択できるようにしました。

子供たちが主体的に話し合いを進めることができるように、1学期の調べ学習の成果など、根拠をもって提案するとよいことを伝えました。

根拠をもって伝えるよう促したうえで、互いに考えを共有し、よりよい方法を選択できる環境を整えました。

実際に自分の目で見た様子や調べた情報など、根拠をもって話し合うことで、「自分たちで実験する」「実際に行ってみる」「地図を見て話し合う」など、協働して「学び方」を選択し、学びを進める子供たちの姿が見られました。

友達と考えを共有することで、これまでの自分の選択を振り返りながら、よりよい考えを求めようとする姿が見られるようになりました。





この単元では、食べ物から人間の「うんち」に近いものを作る活動を通して、動物の体のつくりとはたらきを理解することを目標に設定しました。第2時は、サンドイッチから「うんち」を作る実験の計画を立て、試行錯誤しながら取り組む時間です。「実験に用いるツールを選ぶ」（選択）、「友達とかかわり、考えを更新する」（協働）場面を仕組みました。



調べたことをもとに
実験計画を立案



学習計画へ

【実験に用いるツールを選ぶ】

ロや胃、腸の中を再現するにあたり、生徒Aは自分の考えた実験方法を提案しました。実験を進める中で、他の班と情報交換を行い、温度やpH、吸収する時間を体内と同じようにすることが重要であると気付きました。その気付きに基づき、実験方法の見直しを図り、器具や薬品を選択・提案するようになりました。

教師の働きかけ

インターネットで調べたことをもとに実験計画を立て、情報交換を通して計画を見直せるように、自由に書き込めるワークシートを用意しました。

班の実験計画に沿って多様な器具や薬品等を準備することで、実験方法を工夫できるようにし、生徒の主体的な活動を支えました。

【友達とかかわり、考えを更新する】

腸の中を再現する実験では、生徒Aの班は効率的に脱水するため、ろ紙を用いてろ過する方法を選びました。情報交換の場で、セロハンに包んで塩漬けをし、脱水する班の様子を見た生徒Aは、染み出た水分が透明であることに驚き、予備の実験材料を使って対照実験を行い確かめました。実験の結果、時間をかけて脱水したほうが体内に近い状態を再現できると考えを見直しました。

実験方法を見直すきっかけをつくるため、実験の中盤に情報交換の場を設定しました。他の班から情報を聞き、自分の班へ持ち帰り、検討する時間を十分にとりました。

あらかじめ実験材料を2つ渡しておくことで、必要に応じて対照実験ができるようにし、根拠をもって選択できるようにしました。



実験計画に沿って薬品等を準備



温度を確認して実験



授業の中盤で情報交換

生徒が実験方法を考える際に、「多様な器具や薬品」や「予備の実験材料」を準備したことで、自分たちの予想を確かめるための実験方法を工夫することができました。

実験の中盤に班ごとに情報交換を行えるようにしたことで、実験方法を見直す姿が見られました。





水難事故の際、自分の命を守るための行動を理解することを目指しました。第6時では、自分の泳力で身を守ることができる行動・着衣の検証をしました。「身に着ける服や物を選び、自分の設定した課題に取り組む」（選択）「友達とかかわり、考えを更新する」（協働）場面を仕組みました。



それぞれが考えた衣服で浮いている生徒



学習計画へ

【救助を要する状況】

キャンプに来た。池の近くの公園で遊んでいたところ、ふいに足から池に落ちた。池の底に足はつかず、落ちた側のへりには捕まるところがなく上がることができない。上ることのできるようなヘリは反対側であり、泳ぐとしたら1分間は泳ぎ続ける必要がある。池には木やこみなど様々なものが浮いている状況である。当然着衣である。

自分の水泳の力量



『結果』
・泳ぐのは無理。
・服を着ている時点で泳ぐのは難しいし体力がもたない
浮いて待つのが自分には体力面でも最適
『現実的な浮くのいい服装』
・帽子、ダウン、ジーンズ（水通しにくい）、靴（山にキャンプしに行くときは、寒いと考えたため、ダウンを着ている進率も高いから、現実的）

自分の身を守ることができるキャンプでの現実的な服装はこれだ！



検証後のまとめ

【身に着ける服や物を選び、自分の設定した課題に取り組む】

水難事故の際、自分の泳力や着衣を考慮したうえで、命を守るための行動をとる必要があります。そのため、着衣泳では生徒が自分の課題を設定し、検証する着衣を準備しました。

生徒Aは泳ぎがあまり得意ではないため、「浮いて待つ」ことができる着衣を探すことを課題とし、上着には軽くて空気を含むダウンジャケットを、ズボンには浮きやすいと考えた綿素材のものを用意し、検証授業に臨みました。

【友達とかかわり、考えを更新する】

検証の授業では、それぞれが準備した服装で着衣泳を行い、泳ぐ・浮く活動をグループ内で見合いながら検証しました。

生徒Aはダウンジャケットがよく浮くことを確認し、満足していましたが、綿のズボンは水を吸って動きにくいことに気付きました。さらに、1人1台端末を用いた班でのかわりの中で、班員がはいたジーンズが水を通さず、下半身もよく浮いていることに驚き、次時の検証では自身もジーンズを着用しました。

教師の働きかけ

水難事故に遭った場合、「泳いで岸までいく」「助けが来るまで浮いて待つ」といった視点をもたせたうえで、課題を設定させました。

着衣泳で用いる服装は自由度を広げました。体験してほしい厚手の冬服については、教師も準備しておきました。

バディ等安全面を保障したうえで、検証する時間を十分に確保しました。泳いだり、浮いたりした感想を友達と自由に意見交換できるようにしました。

友達との意見交換の他に、生徒間で互いの検証の成果を1人1台端末で共有できる環境を整え、考えをまとめる際の参考にさせました。

自分の命を守る行動を理解するため、体操服などの一律な衣服で着衣泳を行うのではなく、より浮きやすい服装を考えて準備しました。その結果、自分の生活を想定して衣服を選択することができました。

着衣泳の時間には、自分が準備した衣服で泳ぎ方や浮き方を自由に検証できる時間を設け、意見交換の場を設けました。これにより、様々な衣服の特徴を知ることができ、自分の考えを振り返り、新たな視点を得ることができました。





「おもちゃまつりへようこそ」の単元では、おまつりに園児を招いて交流を図ることを単元のゴールとして設定しました。第9時、10時は、事前練習として1年生とおまつりをして、改善点を考える時間としました。「自分の学びの成果や課題を把握する」（調整）「課題を次への学びに生かす」（調整）場面を仕組みました。



輪投げに挑戦する1年生の姿



学習計画へ



おもちゃの調整をする子供の姿

【自分の学びの成果や課題を把握する】

1年生を招いて「おもちゃまつり」を開催しました。子供たちは、自分たちが準備したおもちゃで1年生が楽しそうに遊ぶ姿を見て、満足していました。

しかし、年下の子との交流を通して、遊びの説明が1年生にはわかりづらい表現であったり、投げる距離が遠すぎたりするなどの課題が明らかになりました。

【課題を次の学びに生かす】

1年生との「おもちゃまつり」を終えた後、園児との交流に向けて話し合いました。「輪投げは1年生でも遠くて入らなかった」「作るのに時間がかかって、余り遊べなかった」など、様々な課題が挙がりました。

これらの発言を受けて、作り方の説明文を見直す児童Aや、実際に何度も輪を投げて園児が楽しめる距離を検討する児童Bの姿がありました。児童Cのグループでは、再度ルールを見直す話し合いが始まりました。

教師の働きかけ

1年生を招いておまつりを開催し、事前練習だけでなく、年下の子との関わりを通して充実感を味わったり、課題を明らかにしたりする場を設けました。

「1年生が楽しめるおまつりにしよう」という本時の目標を振り返り、園児との交流に向けて、どのように改善すればよいかを問い直す時間を設けました。

1年生を招いたおまつりで、よかった点・反省点・困った点などを話し合う場を設け、自分たちの取り組みを振り返る機会としました。

様々な視点から改善策を考えられるように、グループごとの課題を全体で共有できる場を設けました。

振り返りの場を設け、自分たちの取り組みを見直すことで、よかった点（成果）だけでなく、自分たちやお客さん（1年生）が困ったことや、変更すべき点（課題）を把握することができました。

課題を把握することで、園児との交流に向けて、グループ内で自分たちの店をよりよいものにしようと、主体的に話し合う姿が見られました。





毎時間、自分の考えを言葉で表現し、振り返りを行いました。問題解決の過程を整理し、既習事項と結び付けながら、自分の考えをもって問題を解決したり、グループで話し合ったりする態度を育成していきます。「学びの成果を把握する」（調整）、「学びを共有し、自分の考えを深める」（協働）場面を仕組みました。

振り返りシート



OPPシートへ



振り返りの共有

【学びの成果を把握する】

単元前半の振り返りには、「振り返りの視点」を明確にした振り返りシートを使用しました。「樹形図を使えた」「組合せを変えればできる」など、獲得した知識や技能に関する内容が多く見られました。

学習を進める中で、単元前半で学んだ内容を活用し、条件に合う方法を見つけたり、重なりを整理したりする姿がありました。また、「前回と違うところがあった」など、前時と本時の学習を比較する児童もいました。

【学びを共有し、自分の考えを深める】

振り返りを全体で共有することで、友達の振り返りと比較し、「自分が今どんなことを身に付けているか、どこでつまづいているか」に気付くことができました。

また、1人1台端末で簡単に他者の振り返りを参照することで、「振り返り方」を学ぶ児童も多くなりました。図を描いたり、ノートの写真を撮って貼り付けたりするなど、振り返りの質を高め、それを学習に生かすことができました。

教師の働きかけ

単元の初めと終わりに、同じ問いに取り組む場を設けました。目指す姿を明確にし、単元終了時に再び同じ問題を解かせることで、解答や考え方の変化（自己の成長）に気づけるようにしました。

毎時間の導入時に、前時の自分の振り返りを見返す時間を設けました。また、深い気づきや学びをつなげている児童の振り返りを電子黒板に映し、全体で共有することで、学びを調整することの価値付けをしました。

児童の振り返りに対して、教師が児童の考えや粘り強く学習に取り組む過程に注目し、コメント（価値づけ）を行うことで、児童が学習のつながりを自覚できるようにしました。

振り返りシート（OPPシート）を活用し、毎時間、学習の振り返りを行ったことで、前時との違いに気付き、「自分の考えを見直す姿」「友達の考えに学び、整理の仕方を工夫する姿」「『前はできなかったけれど、今はできた』と成長を実感する姿」が見られました。また、児童の振り返りから、教師が児童一人一人の学習状況を把握することもできました。

※OPPシートは、児童が一枚の用紙に授業前・中・後の学習履歴を記録し、自分の学習を振り返り、自己評価を行うためのシートです。



「ネットボール」の単元では、必要な練習やグループの実態に応じた作戦を考え、グループを成長させることを単元のゴールとしました。第6～8時では、自分で考えること、友達とともに考えることができるように、「学びを振り返り、次の学びに生かす」（調整）、「対話や端末活用を通して、意見や考えを交流する」（協働）場面を仕組みました。



ゴール下で4対3の練習を行う児童



学習計画へ



作戦ボードで動き方を確認する児童

【学びを振り返り、次の学びに生かす】

Aグループは、前時までにパスが上達し、グループノートに「シュート場面までいけるようになった」と記入していました。しかし、シュートが決まらないという課題を感じ、「ゴールの近くでパスをもらう」とめあてを修正し、「ゴール下でのシュート」と「4対3」の練習が必要だと考えました。「4対3」の練習後の振り返りでは、同じ場所でパスを出すことで相手に読まれ、パスカットされることに気づき、次時では「パスの起点を左右に分ける」とめあてを再修正しました。

【対話や端末活用等を通して、意見や考え等を交流する】

ゲームのハーフタイムや振り返りの時間には、どのように動くべきか、どのような修正が必要かを話し合いました。Aグループの児童Bは、端末で撮影した動画をもとに質問や相談をしながら動きを確認していました。丁寧なアドバイスを受けたことで、次のゲームではフリーになってボールを受け、シュートを決めることができました。成し遂げた喜びをグループ全員で共有することができました。

教師の働きかけ

単元の前半が終わった段階で、グループノートにグループの強みや後半のめあてを記入させました。それらを確認させることで、練習方法や作戦をグループで考えることにつなげました。

自分たちで練習を考えられるよう、単元前半に様々な攻め方につながる練習を提示しました。

1時間の中で、必ず2回はグループで話し合う場を設けることで、グループのよい点や課題を確認し、修正する機会としました。

端末を積極的に活用させることで、ハーフタイムには、動画を見ながら作戦ボードを用い、よりよい作戦を考えられるようになりました。

自分やグループのよい点や課題を明確にさせるためにグループノートを活用したことで、ノートの振り返りを生かした作戦や課題克服のための練習方法を自分たちで考え、実践することができました。

毎時間、振り返りを行い、話し合いの場を設定したことで、よかった点や課題を次時の作戦立案につなげていく姿が見られました。



福祉実践教室で学んだ内容をもとに、「障害があっても一緒に遊べる工夫」を考え、地域の人に提案することを単元のゴールに設定しました。第9～12時は、クラス内でアドバイスし合い、課題を改善して発表会を行う時間です。「他者の評価から自分の課題を把握する」（調整）「地域の方々との交流を通して学びを深める」（協働）場面を仕組みました。



学習計画へ

他の班と
デモンストレーション

他の班へのアドバイスを
書き込む姿

地域の方々を招いた
発表会

【他者の評価から自分の課題を把握する】

他の班の遊びを体験し、アドバイスし合いました。視覚障害体験を考えた班では、「サポートしすぎるとやりがいを感じられない」というアドバイスを受け、福祉実践教室で「障害があっても難しいことに挑戦したい気持ちはある」と聞いたことを思い出しました。そこで、接触や転倒の危険がある場合や、要望があった場合にのみサポートするように修正するなど、発表会に生かそうとする姿が見られました。

【地域の方々との交流を通して学びを深める】

地域の方々を招いて、発表会を行いました。会の中で視覚障害のある方でも一緒に遊ぶことができる工夫を提案しました。地域の方から「サポートを必要とする人と出会ったときは、迷わず行動してほしい」という考えを聞き、「サポートを必要とする人がいたら声をかけていきたい」と、日々の生活に生かそうとする姿が見られました。

教師の働きかけ

遊びを考える前に、福祉実践教室で学んだ「安心」「安全」「思いやり」「やりがい」「楽しさ」のキーワードを確認しました。相手のことを考える視点をもって活動に取り組むことで、改善策が出せるようにしました。

福祉実践教室で学んだことから、「福祉の考え方で大切にしたい思い」を班で共有させ、何度も確認しながら計画・準備を進めるようにしました。

地域の方々にも活動を知っていただき、支え合う地域となるよう、地域の方を招いた発表会をもちました。

地域の方の感想を見聞きする場をつくり、子供たちの考えが広がるような機会としました。

班で設定した「福祉の考え方で大切にしたい思い」を何度も確認することで、その思いと照らし合わせながら周囲の意見を聞き、自分の課題を把握し、修正するかどうかを話し合う姿が見られました。

地域の方々との交流で、自分の生活に立ち返る考えを聞いたことで、学校生活でも、友達を想う言動が表出するようになりました。

